

シアターリーグ・シナリオリーグ・モンレーブ

「—Mon Rêve— エンジョーブ」

珠依 ゆら 作

登場人物紹介

うえはらはづき
上原葉月

オーナー。美しく、そしてそれを自覚している女性。客の前では、そこそそ一部の隙もないが、オフ時は徹底的に手を抜いたスウェット姿だったりする。

さのあきら
佐野 暁

パティシエール。仕事に今ひとつ本気になれない。陽気でかわいい女性。愛嬌のある仕草。微妙な年齢に悩む。

みなづきこうだい
水無月幸太

シェフ・ド・キュイジーヌ。気が短いが腕は確かな職人気質。死んだ恋人を想い続けている。

あんざいりようすけ
安西僚介

ソムリエ。みんなのお母さんの存在。

たかさわかおる
高沢 薫

キュイジーニエ。いい加減を絵に描いたような男、ゆえに暁と気が合う。

にむらおとじろう
仁村音次郎

見習い。料理人を夢見る少年。純粹で無知。

いちのせりか
一ノ瀬里茄

キュイジーニエ。料理にしか興味がない。

かたくらよしなお
片倉義直

先代からの常連客。小柄で金持ちのじいさん。週に3回は美女を連れて店を訪れる。店の生き字引的存在。

アンサンブル 店の常連客など

レストラン玄関前

ミュージカルナンバー「*mon rêve*(モンレーブ)」。

大きな荷物を背負った少年、にむらおとじろうが颯爽とやってくる。その手には手紙が、しっかりと握られている。

音次郎 「ここかあ。フレンチレストラン『モンレーブ』」

音次郎の前で扉が開く。

ホール

ダイナー中の店内へ、足を踏み入れる音次郎。食事を楽しむ客たち。ソムリエ、あんざいりようすけ。洗練されているが、気さくな雰囲気の男性。客の中に、かたくらよしなおがいます。白髪の男性。美しい女性二人と

ダイナーを楽しんでいる。善直のグラスにワインを注ぐ僚介。

僚介 「これで最後ですよ、片倉様。お身体に触ります」

オーナーのうえはらはづきが、善直のテーブルにやってくる。上品な黒のドレス姿。美しく、そして、それを十分に自覚している。

葉月 「ようこそお越しくございました。片倉様」

善直 「今夜も別嬪だなあ、葉月さん」

葉月 「お料理はいかがでしょう」

美女1 「繊細で大胆で」

善直 「色気がある」

美女2 「料理に色気？ おかしな表現ね」

美女1 「でも、その言葉がピッタリだわ」

美女2 「セクシーな気分になる？」

善直 「ハイタッチ(美女の胸に触れるマネ)」

美女二人、嬌声。

葉月 「……」

ホールの様子を覗く音次郎。

僚介 「いらつしやいませ」

音次郎 「いえ、僕、お客じゃありません。今日からここでお世話になる、仁村音次郎です。よろしくお願ひします」

僚介 「オーナー」

葉月 「見習いの募集なんて出した覚えはないわ。今忙しいの。安西さん、ワインカーブにでも閉まっておいてよ」

葉月、さっさと客の下へ戻る。

僚介 「見ての通り、ディナーの真っ最中。非常に迷惑なんだけどね」

音次郎 「すみません。もっと早く着く予定だったんですけど、乗るはずの電車に乗り遅れて。電車は一日、二本しかないんですね」

僚介 「ほとんどのお客様は車でお越しになる。湖畔のホテルに一泊して、お帰りは翌朝だ。ま、とにかく、裏から回ってもらおうか」

音次郎、退場。常連客、すえながたけお、もと子夫妻が帰り支度をしていく。
末 永 武男

武男 「いやあ、今日のメジマグロは絶品だったね」

もと子 「こちらに来るといつもそう。おいしすぎて、つい食べ過ぎてしまうわ」

武男 「それはそうと、シェフは相変わらず、ちらりとも姿を見せないね」

葉月 「料理の腕は一流でも、お客様にお目にかけるほどの姿でもありませんので、どうぞご容赦を」

武男 「あはは、言うねえ。葉月ちゃんも」

もと子 「いやねえ、あなた。いつまでも葉月ちゃん、だなんて。彼女はれっきとした、モンレーブのオーナーですよ」

武男 「いいえ、末永様。昔と変わらさずご贖いくださって、本当に嬉しいですわ」
「こんなことを言うと、天国で先代が怒るかもしれないが、みなづき 水無月 シェフの料理は、お父さんにまったくひけをとらない。修行の賜物だね」

葉月 「父も、喜んでくれていると思います」

武男 「そうだね、お父さんも安心だろう。店もお嬢さんも、任せられる人ができて」

葉月 「え？」

武男 「結婚の時は、残念ながら力になれることも少ないけど、離婚訴訟の時は、お役に立ちますよ」

もと子 「いやだわ、そんな冗談」

武男 「そうだなあ。シェフのコンソメが飲めなくなっちゃったら、困るなあ」

葉月 「いえ、あの」

武男 「次は、ヒラメの時季を逃さないように来たいね。ただ、年中忙しいのが、弁護士の仕事の難点だね。困ったもんだ」

もと子 「あら、困らないわ。その時は私、お友達とお邪魔しますから」
末永夫妻、笑いながら退場。営業用の微笑から素の表情に戻って、ため息をつく葉月。

僚介 「幸せが逃げるよ」

葉月 「幸せなんて、このドアから今、勢いよく飛び出していったわ」

僚介 「片想いだもんねえ」

葉月 「安西さん。誰が誰に片想いよ」

僚介 「レストラン、モンレーブの美しきオーナーが、シェフ・ド・キュイジーヌに」

音楽カッティン。

調理場

あわただしい様子。シェフ・ド・キュイジーヌ、みなづきこうだい。他
水無月幸大人をシャットアウトするような冷たさが、背中の辺りに漂っている。金髪高沢薫のキュイジニエ、たかさわかおる。フレンチの料理人に相応しくない

雰囲気。もう一人のキュイジニエ、いちのせりか
一ノ瀬里茄は、人に媚びた所がない

印象。そして、パティシールのさのあきら
佐野 暁。動きが軽く、愛嬌のある女性。裏口から音次郎が入ってくる。殺気だった雰囲気、気おされる音次郎。薫

とぶつかりそうになる。

暁 「ちよつと高沢、ポワル返しなさいよ。それ、私の。勝手に使わないで」

薫 「今度からでっかく、名前書いておけ ば？」

暁 「生意気く。洗ってよ。今すぐ使うんだから」

薫 「自分でやれって」

暁 「そんな偉そうな口の聞き方は、ドレッセがもつとマシになってからにしてよ」

幸大 「お前ら随分余裕だな」

薫 暁 「両手はふさがってるんだって！」

幸大 「里茄！」

里茄 「前菜、遅らせていいですか」

幸大 「(舌打ち) そこのお前」

音次郎 「は、はいっ！ えっ？ 僕ですか？」

幸大 「どう見てもお前が一番暇だろ。早く、そのポワル洗え」

音次郎 「え？ ポワル？ あ、このフライパンのことかな」

薫 「おい、小学生。どこから入った？」

調理場と客席をつなぐ扉から、僚介が入ってくる。

僚介 「仁村音次郎。新しいアプランテイ」

音次郎 「あふ？」

暁 「かわいい。すずめみたい」

音次郎 「すずめ？」

薫 「喜べ、里茄。煮方に昇進だな」

僚介 「シエフのご機嫌、損ねるんじゃないよ。採用前にクビになりたくなきやね」

客席へ続く扉が開き、場面転換。

ホール

閉店後の店内。少し照明が暗くなっている。葉月と幸大が、音次郎と向かい合って座る。状況を見守りながら夜食を取る、僚介、薫、暁、里茄。

葉月 「ごめんなさい。早速こき使われたみたいね。でも、さつきも言ったとおり見習いの募集はしてないわ」

音次郎 「でも、でも僕、紹介状持ってます」

葉月 「(手紙を受け取る) 紹介者、片倉善直」

善直 「ほっほっほ」

いつの間にか、善直が顔を覗かせている。

音次郎 「片倉さん」

善直 「おお、よく来たなあ。静江さんは元気かい？」

音次郎 「はいっ。片倉さんと、僕のばーちゃん、友達なんです」

善直 「静江さんは一番古い、ガールフレンドでな」

幸大 「おい、じーさん。昔の女に見得張りたいなら、てめえで責任持て。運転手でも秘書でも、話し相手でも、好きに使えばいいだろ」

善男 「(胸のあたりをおさえる) ああああ」

音次郎 「大丈夫ですか？」

幸大 「遊びじゃねえんだ。洗い物一つ満足にできない奴を、手取り足取り仕込めってか」

善直 「いやいや、偉くなったもんだ」

幸大 「なんだと」

善直 「水無月シェフだつてもとは、先代に拾われた身。包丁を握ったことすらなかったのを、辛抱して育てていただいたご恩があるだろうに。受け継いだ技術を独り占めとは、ずいぶんケチな話だ。上原シェフの残したこの店を、自分の代でつぶすおつもりか」

幸大 「こんな、すずめみたいな奴と一緒にすんじゃねえ。俺はこいつの百倍、いや千倍、才能とやる気に満ち溢れてたんだよ」

音次郎 「やる気あります。僕、頑張ります」

僚介 「才能がありますって言わないあたりが、かわいいじゃないの。どこかの誰かさんと違って」

幸大 「泣きごとと言うようなら、すぐ追い出すぞ」

音次郎 「は……」

善直 「音次郎くん。レストラン、モンレーブのシェフ、水無月幸大さんだ。至らないところもあるでしょうが、どうか、一人前にしてやってください」

音次郎 「よろしく願いますっ」

幸大、無言のまま調理場へ入っていく。

音次郎 「かっこいい」

善直 「水無月シェフも、この店で見習いをしてたんだよ。そのころから向こうっ気が強くてなあ。相変わらずだ」

音次郎 「そのあと、フランスに渡ったんですよね。コンクールで賞を取って、向こうでも絶賛されたって。そんな人に弟子入りできるなんて、くーっ、僕はなんて幸せなんだろう」

葉月 「その幸せな気持ち、長く続くことを祈るわ」

音次郎 「それはどういう……むぐつ」

暁が、音次郎の口に、シュークリームを突っこむ。

暁 「そのうち、夢にまであいつが出てくるようになるかもね。なんてステキ」
音次郎 「うわっ、これ、めっちゃ美味しい」

善直 「パティシエールの佐野暁さん」

音次郎 「パティシエール。じゃあこれ、佐野さんが？」

暁 「見ての通り、キュートな上に才能にも恵まれちゃってる、嫌味な女ってわけ」

薫 「おーおー、返答に困るようなギャグ言ってるじゃねえって」

暁 「ギャグなのはあんたの髪型よ」

善直 「キュイジニエの高沢薫くん」

薫 「ホントに小っせえな。メシ食ってるのか」

葉月 「もう一人、キュイジニエの一ノ瀬里茄。調理場のことは彼女に聞いて」

音次郎 「よろしくお願いします」

里茄 「……」

葉月 「ソムリエの安西僚介」

善直 「彼は女にモテるぞ。わしの次にな」

僚介 「恐れ入ります」

葉月 「もう遅いわ。仁村くん、片倉様をお見送りして」

音次郎 「はい。あの……」

葉月 「オーナーの上原葉月よ。よろしくね」

善直 「相撲部屋にたとえるなら、彼女はおかみさん、母親代わりだ。困ったことがあったら、葉月さんになんでも相談して、頑張るんだよ」

音次郎 「よろしくお願いしますっ」

頭を下げる音次郎。少し照れながらも嬉しそう。善直、音次郎、退場。

葉月 「ここはフレンチレストランよ」

薫 「おかみさん。怒るな怒るな」

葉月 「ま、どうせ、あいつの下に、見習いが居つくわけないわね」

僚介 「だから、おかみさんが必要なんじゃないの？ 稽古が辛い時、苦しい時、母親のように温かく見守る存在がね」

薫 「そんな風に見守られた記憶ねえな。たまには ねぎらい の言葉でも、かけてみるよ」

葉月 「労いたくなるくらい、仕事に打ち込んでくれるとありがたいわ」

薫 「なに言ってるんだ。調理場は戦場だぞ」

暁 「確かに」

僚介 「料理人に必要なものは？」

薫 「生まれつきの才能。体力。手の抜きどころを見極める。どんな嫌味も右の耳から左の耳に抜く、高度な技術」

暁 「私はかよわい女だもの。水無月の嫌味には心が折れるわ。労災降りる？」

葉月 「さあ。ウチの調理場に、かよわい女なんていたかしら。覚えがないわ」

暁 「安西さん、なんとか言ってるよ。レッサーパンダの皮をかぶった、ハ

イエナに」

葉月 「どういう意味かしら、暁ちゃん」

暁 「見た目に騙された男は、二枚舌と年増のホステス並みのがめつさで、身包みはがされる。だから用心すること」

葉月 「お褒めの言葉ありがとう。男からどれだけ搾り取れるかが、女の器量ですもの。あなたは大丈夫？　こんな山奥で、しかも一日中調理場にこもってるうちに、行き遅れでもしたら私、責任を感じちゃうわ。売れ残りのタルトなら、誰かが食べてくれるでしょうけど、女はそうもいかない悲惨よね」

暁 「その言葉、そっくりそのままお返しするわ！」

僚介 「まあまあ。飲み頃を過ぎたワインも、それなりに郷愁を感じられるものだよ」

薫 「慰めになってねえ」

里茄 「バカバカしい。男だとか女だとか、どうでもいいです。料理人に必要なのは腕だけ。私は水無月シェフの技術を全部盗んで、さっさとこんな田舎から出て行きます」

僚介 「おや。珍しくよくしゃべったね」

里茄 「お疲れ様でした」

里茄、退場する。

薫 「里茄って男いるのかな」

葉月 「やめてよ、高沢」

僚介 「たぶんね」

暁 「なんでわかるの？」

僚介 「んー、なんとなく」

暁 「やらしい」

薫 「想像できねえ」

葉月 「しないでいいわよ……頭痛い。おやすみなさい」

僚介 「見習いくんの部屋はどうする？」

葉月 「私の部屋から出来るだけ遠ざけて」

暁 「理性が飛んで、襲っちゃいそうな自分が怖いのか？」

薫 「一人寝が寂しかったら、いつでも言えよ」

葉月 「良かったね。売れ残りのダークチェリータルトでもいいって」

葉月 「もう黙ってよ！」

照明カットアウト。

宿舎

荷物を背負った音次郎。僚介の後に続く。

音次郎 「店と宿舎がつながってるって、便利ですね」

僚介 「おかげでお互い、四十六時中顔つき合わせていられるよ。どうなんだろうね、この職場環境は」

音次郎 「職場恋愛とか、簡単に生まれちゃいそうですよね」

僚介 「一つ忠告しておこうか。この店に、音次郎が手を出して火傷をしない女

「は、一人もない」
音次郎「それは困ります。僕は、火傷がしたくてこの店に来たんじゃありません。一流の料理人になるために来たんです！」

音次郎のナンバー「僕の夢」。僚介、呆れたように退場。スウェット姿の葉月がやってくる。

葉月 「うるさいわねえ。何時だと思ってるのよ」

音次郎 「あの、どちらさまですか？」

葉月 「どうやら、一日でクビになりたらしいわね」

音次郎 「え……葉月さん!？」

僚介が、掃除用具を手に戻ってくる。

僚介 「終わった？」

音次郎 「はい」

僚介 「君の部屋はここ。長いこと使ってないから、埃だらけだと思うよ。はい
(掃除用具を渡す)」

音次郎 「何から何まで、ありがとうございます。(窓を覗く) こっちは森になってるんですね」

葉月 「一つ忠告しておくわ。絶対には森には入らないで。迷子になって、捜索隊を出す騒ぎにでもなったら、物笑いの種だわ」

音次郎 「捜索隊」

僚介 「実際あったんだ。女の子が森に入ったきり、行方不明になったそうだよ」

葉月 「もう十年前の話よ」

音次郎 「不気味だなあ。本当に迷子になりそうですね。あれ、人が誰かいます。ほら、あそこ。見てください」

葉月 「いやよ。こんな時間に、誰が森に入るって言うの？」

音次郎 「でも。あれ、水無月シェフじゃないですか？」

葉月 「山菜取りでもしてるんじゃない? (あくびをして) おやすみなさい。お肌のゴールデンタイムを、逃すわけにはいかないわ」

僚介 「おやすみ」

音次郎 「あ、おやすみなさい」

葉月、僚介退場。音次郎、もう一度、窓の外をのぞく。音楽フェードイン。
音次郎、あわてて自分の部屋に駆け込む。

森の中

ダンスナンバー。蒼白い光が射す木立を、幸大がぼんやりと歩いているやがて、白いドレスを着た女性が、現れる。幸大の亡き恋人、花梨。背中合わせの二人。夜空に手を差しのべる。

ロビー

ソファで昼寝をしている幸大。真新しいコック服に身を包んだ、音次郎がやってくる。

音次郎「見習い稼業の第一日目。僕の料理人としての人生の夜明けだ。あつ、里茄さん。おは……(里茄に片手で口をふさがれる)」

里茄 「今起こしたら、可燃ゴミと一緒に出されるわよ。さっさと調理場へ行って」

音次郎、走っていく。

里茄 「レストラン、モンレーブの朝。一日の始まりを告げるのは、シェフ・ド・キュイジーヌ、水無月幸大。店の最高位が誰よりも早く起き出し、市場へ出かけていく。シェフは仕入れを弟子に任せることなく、食材を見極め、その日のメニューを作る」

僚介 「一ノ瀬里茄。料理の専門学校を卒業後、大手ホテルの厨房に入る。彼女がモンレーブに来たのは、一年前。幸大の噂を聞きつけ、紹介状一つ持たず、単身乗り込んできた」

暁 「ちよつと嫉妬するかも。料理人に必要な条件が大体揃ってる」
僚介 「女性にしては珍しく、味覚、技術のぶれがない」

里茄、ダンスソロ。

里茄 「あとはどうしたらいいの？何が足りない？どうしたらシェフになれる？」

暁 「オリジナリティ」

薫 「愛嬌？ あー、眠い」

里茄 「必要ありません」

暁 「ねえ、お母さん。お腹すいた」

薫 「何が食べたいの？」

里茄 「高沢薫。ストーブ前のポジションを任されている。ストーブ前というのは、スピードと体力が要求される、いわゆる花形。それから、一日二度の賄い作り。シェフに自分の腕をアピールできる、絶好の機会」

暁 「んー、カツ丼なんていいなあ」

僚介 「ここはフレンチレストランじゃなかったっけ？」

薫 「いや、でも俺も食べたい。いいわよ」

音次郎 「あれがないと作れないんじゃない？」

暁 「あれって？」

音次郎 「だから、カツ丼作るあれ、あるじゃないですか。お玉って言うか、鍋って言うか」

薫 「ものを知らない奴だな。これは親子鍋って言うんだ」

音次郎 「へええ。そう、それが……なんであるんですか!？」

暁 「やったあ。高沢ちゃん、偉い！」

薫、ダンスソロ。

里茄 「水無月シェフ。新しく見習いも入ったし、私にも賄いを作らせてください」

幸大 「薫に言え」

里茄 「高沢さんなんて、あんないい加減な人、口を聞きたくもありません。

幸大 「やる気の薄さが伝染します……なんですか」
「お前が正しい」

里茄 「だったら」

幸大 「けどな、あいつはお前に欠けてるものを持つてる」

里茄 「……」

幸大 「わからないか」

里茄 「わかりません」

幸大 「じゃあわかるようになれ。料理人には絶対、必要なものだ」

薫 「ご飯より。なんだ、その眉間のシワ」

幸大 「いいところで叩き起こしやがった」

暁 「いつにも増してご機嫌斜め」

薫 「もうちよつとで女とやれそう、てとこで叩き起こされたってさ」

僚介 「お気の毒様」

音次郎 「めちやめちや美味しい。何年くらい修行したら、こんな風になれるんですか」

薫 「俺の場合は生まれつきの才能だから。参考にならねえぞ」

葉月 「朝っぱらから、よくそんなもの食べられるわねえ」

僚介 「午後二時。オーナー、上原葉月がようやく姿を現す」

葉月 「(音次郎に) なに？」

音次郎 「いえ。完璧だなあ、と思ひまして」

僚介 「昨夜のギャップと戦ってる？」

葉月 「十円の得にもならない男の前で、着飾ろうなんて思いもよらないわ」

薫 「いっそのこと素っ裸でいれば？」

葉月 「相変わらず失礼なガキね」

葉月と薫にスポット。

葉月 「高沢薫くん。〴〵実家は横浜の洋食屋さんだそうね。お父様とお母様でやっついていらっしやるの？」

薫 「親父はよそに若い女作って出てって、母ちゃん一人で店やってる」

葉月 「あなたも手伝ってたの？」

薫 「まあ」

葉月 「そう、偉いわね。料理が好きなのね」

薫 「別に。まあ、作るのも食べるのも嫌いじゃねえし。一昨日、母ちゃんが勝手に面接の予約してさ。なんか、ここで昔ギャルソンやってたおっさんと、知り合いだったんだって？」

葉月 「……」

薫 「ところで葉月はさあ」

葉月 「葉月！？」

薫 「男いんの？」

葉月 「高沢くん。ウチのシェフは気が長いほうじゃないの。まずはその口の聞き方」

幸大 「さっさと着替える」

葉月 「ちよつと待って。この坊や雇うかどうか、まだ決めてないわよ」

幸大 「お前に、こいつが使えるかどうか、判断ができるのかよ」

葉月 「精神安定剤。耐えられない。今日のアイスは何？」

暁 「今日は正統派で行くわ。ヴァニラと胡麻」

薫 「胡麻のどこが正当だよ」
暁 「いいじゃない。ここはジャポンなんだから」
葉月 「ジャポネーズには、美容のための胡麻。あとで味見させて」
薫 「おっとお、今日は随分友好的だな」
葉月 「中身は欠陥だらけでも、腕が確かなのは知ってるわ」
僚介 「暁のデセールは妙に幻想的で、女性受けするよね」
暁 「もつと誉めて」
葉月 「そして完璧なタイミングよ。今日は、『フレンチを食べて美しく痩せる会』の、予約が入ってるの」
幸大 「なんだって？」
葉月 「いつもお使いいただいている本田様の奥様、とそのお友達。八時に四名のご予約です。お料理はシェフにお任せ。お肉やお魚は、できるだけ脂身のないところをお願いします。ソースも重いものは止めてください」
幸大 「……」
葉月 「ワインはボルドーのものを選んでください。デザートは美容にいい食材で、カロリーを抑え目で、とのことですよ」
暁 「わがまま〜」
葉月 「それでね、このお客様のところだけでも、ご挨拶してくれないかしら」
幸大 「作り笑顔振りまくのはお前の領分だろ。それとも女相手じゃ、得意の色仕掛けが使えねえから、心もとないか」
葉月 「わかりました。せいぜい料理に専念してください。ただし。その品のなさが料理に出ないように、くれぐれもよろしくお願いしますね」
暁 「ごちそうさま」
薫 「食ったら眠くなつた」
それぞれ、散っていく。取り残される音次郎。

調理場

音次郎が、扉の覗き窓から、客席の様子を伺っている。そわそわと落ち着かない様子。僚介が入ってくる。扉に頭をぶつける音次郎。

僚介 「おっと、ごめん」
音次郎 「葉月さん、どこ行っちゃったんでしょ」
暁 「なんか用事？」
音次郎 「いえ、そういうわけじゃ。でもさっきから姿が見えないから。昼間のこと気にしてるんじゃない」
暁 「さっきのって？」
音次郎 「だから、水無月シェフとの——あれ、いくらなんでもひどすぎ——痛っ！」

再び開く扉に後頭部をぶつける音次郎。薫が入ってくる。

薫 「あんなんで傷つくような玉じゃねえって」
音次郎 「高沢さん、ひどっ——うわっ！」
幸大 「(後ろから音次郎の襟首をつかむ) 僚介、こいつ」
音次郎 「すみません、すみません」

僚介 「なぜ謝る？」
音次郎 「よくわからななんですけど」
幸大 「ホールにやるわ。営業中、調理場で役立つことねえし」
僚介 「いや、いらない」
幸大 「遠慮すんな」
僚介 「いらない」
幸大 「――」

僚介、フルーツを手に出していく。

暁 「さあて。開店の時間ですよ、ヤスジロウくん」
音次郎 「音次郎です。えっと、僕はどうしたら（幸大の方に行きかける）」
薫 「命が惜しかったら、営業中、幸大には話しかけんな。里茄」
里茄 「高沢さん、私に押し付ける気ですね」
薫 「新入りの面倒見るのは、お前の仕事だろ」
里茄 「とりあえず、洗い物を片っ端からよろしく。昨日みたいに、鍋と食器類、同じスポンジで洗わないで」
音次郎 「わかりました。あとは何を」
里茄 「仕事の邪魔をしないこと」

音楽カットイン。

ホール

来店する客を出迎える僚介。席に案内したところで葉月が現れ、挨拶をする。

音次郎 「完璧だ。容姿も身のこなしも、不自然なまでに完璧だあ」
薫 「元、国際線のキャビンアテンダント」
音次郎 「女優にも負けないオーラ」
葉月 「もうちょっと若くて自惚れていた時は、ランウェイを歩くのが夢だったわ。だけど父親が大反対。遊び人のくせに娘にはうるさくて、航空会社に就職するのもいい顔しなかった。でもなんとか押し切ったわ。自分の人生だもの。ようこそお越しくございました」

三十代後半くらいの男女が来店。男の方が、葉月に意味深な視線を送る

音次郎 「今のは？」
薫 「葉月のかかりつけの歯医者」
暁 「そしてパトロン」
音次郎 「ええ！？」

続いて、もう一組のカップルが来店。男が出迎える葉月を見るなり、欧米人のような仕草で抱きしめる。

音次郎 「おおっ？」
暁 「あれはCMディレクター」

薫 「妻とは現在、離婚協議中」
幸大 「遊んでねえで、働け」

本田の妻とその友人たち、来店。僚介を見て色めき立つ。それぞれ自分の持ち場に戻る、キューイジニエたち。幸大は、女性客に目を留め、何やら考えている様子。
優雅な仕草で一礼し、テーブルを辞する僚介。その後ろ姿に、女性たちが見とれている。

葉月 「安西僚介。大学在学中、語学留学のためにフランスへ渡る。そして、ソムリエとしての勉強、下積みを始める」

僚介 「ソムリエという職業を、選んだ理由ですか？ お聞かせするほどのことではございません。強いて言うなら、当時の恋人がワイン好きな女性だった、ということでしょうか」

葉月 「水無月シェフと出会ったのは、ブルゴーニュのブドウ畑での収穫の手伝い。お互いの印象は、最悪だったと言う」

僚介 「譲ることを知らない、というか」

幸大 「掴み所がない、というか」

幸大 僚介 「いらついた」

僚介 「それでも、料理とワインの相性を探し出すのが、ソムリエの仕事。シャトー・マルゴー、九十五年ものでございます」

音次郎 「言うなれば、結婚コンサルタント」

僚介 「まあ、そんなとこだね。優美で華麗でたおやかで、女性の持つ美德をすべて持っている。シャトー・マルゴーは正に、ワインの女王」

葉月 「お褒めいただいて恐縮ですわ」

暁と里茄が顔を上げる。

友人1 「本当に、どれもこれも美味しくて」

本田 「実際会ってお話したわけでもないのに、どうしてこんなに、私たちの好みがわかるのかしら」

僚介 「一流のシェフは、お客様を一目見れば、お召し上がりになりたいものがあるじゃないですか。まるで、自分の恋人のこのように」

薫 「要するに、ストロブ前の金田一耕介」

幸大、ダンスソロ。

幸大 「デセール、間に合ってるのか」

暁 「まかせてよ」

葉月 「コースの流れを壊さずに、幕を下ろす。シェフの料理の特性、意図を理解しているからできること。料理とデセールの間にも、マリアージュが存在している」

暁、ダンスソロ。

音次郎 「まさに、デセールの妖精」

薫 「妖、精？（笑う）暁が？」

暁 「偉そうに、呼び捨てにしないでよ。先輩に向かって」

里茄 「高沢さんは基本、誰のことも呼び捨て。彼の頭の中には、上下関係の概念が存在しない。それが許されてしまうのは、どうしてだろ」

暁 「別に許さないけど」

葉月 「パティシエールの佐野暁。水無月が修行を積んだエトワレットブルーで彼女もパティスリーの腕を磨いた。まるで山の天気みたい。気分がコロコロ変わる、困った女。だけどその腕には、水無月も絶大な信頼を置いている。だって、帰国して一時期、仕事から離れていた彼女を、この店に誘い入れたのは、水無月だから」

暁 「誰なの、あれは。師匠の娘？」

葉月 「彼女は、私の知らない彼を知っている」

葉月 「彼は、彼女の才能を認めてる」

暁 「フランスでも、その気になれば店を持てたのに。彼は帰ってしまった」

葉月 「彼女の才能を愛してる」

暁 「彼女の下へ」

葉月と暁のナンバー「私の知らない彼」

ロービー

薄暗いバーカウンターで僚介、暁、薫が、労働後の一杯をやっている。音次郎が、身体を引きずるようにしてやってくる。

暁 「お疲れ〜」

音次郎 「お疲れ様です……」

暁 「なあに？ 雨でずぶぬれになった、すずめみたい。どこか遊びに行こうか」

音次郎 「これからですか？ 元気ですね、暁さん」

暁 「朝から晩まで調理場にいるとき、何のために生きてるのか、わからなくなっちゃうじゃない？」

里茄 「お疲れ様でした」

里茄が通り抜けていく。すぐに戻ってくる。

里茄 「高沢さん。昼の賄い作り、やらせてもらえませんか」

薫 「おう」

里茄 「ありがとうございます」

薫、退場。

薫 「お前、地元にいるのか」

音次郎 「いいい、いませんよ」

暁 「かわいそう（後ろから抱きつく）」

音次郎 「ぼほ、僕は、一流の料理人になるために、ここに来たんです。女の子と付き合うとか、そういうこと考える余裕があるんだったら、修行に没頭します。一人前になるまでは！」

薫 「それまで何年かかると思ってたんだ」

僚介 「そんな禁欲生活に、男の身体って、何日耐えられるんだろうね」

暁 「君は間違ってるよ」

音次郎 「え？」

暁 「料理人つてのは、食欲を満たしてあげるのが仕事でしょ。そんな我慢に我慢を重ねた、怨念を込めた料理で、食べる人を幸せな気持ちにできる？」

薫 「すげーもっともらしく聞こえる」

暁 「いい料理人になりたいなら、恋愛も修行の内。これホント」

ナンバー「恋愛修行」コーラス 暁、薫、僚介、音次郎。里茄にスポット。私服姿。里茄の下へ、北田が駆け寄ってくる。里茄の交際相手。ナンバー中盤からタップダンス。

森の中

舞台、前方上手。薫と音次郎がやってくる。森の中には幸大がいる。花梨が幸大の回りをさ迷うように、現れては消える。

音次郎 「まただ。水無月シェフが」

薫 「こんな夜中に、よくあの森に入るよな。気がしれねえ」

音次郎 「何してるんでしょうね」

薫 「明日のメニューでも考えてんだろ」

音次郎 「でも、女の人と一緒ですよ」

薫 「女？ どこに？」

音次郎 「どこって、ほら」

薫 「……薄気味悪いこと言うんじゃないって。どこに女がいるんだよ」

一人、取り残されている幸大の姿。戸惑う音次郎。

音次郎 「夢……？ あ、高沢さん。待って。置いてかないてくださいよ」

二人、退場。幸大が、再び現れた花梨を抱き上げる。暗転。

ホール

音次郎 「僕、昨夜見てしまいました」

照明フェードイン。音次郎と僚介がいる。外出の支度をした葉月がやってくる。

僚介 「見たって何を」

音次郎 「白いドレスを着た女の人。あれは、十年前に森で行方不明になったっていう、女の子じゃないでしょうか」

葉月 「バカね」

音次郎 「え？」

葉月 「行方不明になって、でも戻ってきたのよ」

音次郎 「え、そうなんですか？」

葉月 「森で友達と遊んでたら、いつの間にか濃い霧に包まれて、地元の間も探しに入ることができないほどだった。でも何とか自力で帰ってきたの」

音次郎 「すごい子ですね」

葉月 「私よ」

音次郎 「へ？」

葉月 「銀行に行つて来ます」

僚介 「行つてらっしゃい」

葉月、退場。

音次郎 「すごい……アンジェリーナ・ジヨリーみたいな人だ。でも安西さん。僕、

確かに見たんですよ」

薫 「お前、まだ言つてんのか」

僚介 「座敷童でも見たんじゃないの？ 子供には見えるつて言うし」

音次郎 「違いますよ。女の人です。白いドレスを着た……水無月シェフと一緒に
した」

薫 「じゃ、幸大に聞いてみるよ」

一同、ソファで昼寝をしている幸大を、振り返る。

音次郎 「今起こしたら、うわあっ」

幸大 「(上体を起こす)……」

音次郎 「あ、あの」

薫 「昨夜、何してたんだよ」

幸大 「……？」

薫 「夜中、森にいただろ」

幸大 「あんな薄気味悪いところに行くかよ」

音次郎 「でも」

幸大 「真鯛のデゴルジェ、終わったか。ランティエユの裏ごしは？」

薫 「え、まだ」

幸大 「さつさとやれ」

薫と音次郎、仕方なく調理場へ向かう。幸大も二人を見送ってから、立ち上がり退場。

僚介 「夜中になると、彼はあの森をさ迷い始める。まるで、誰かを探しているかのように」

ホール

ナンバー「葉月」魅力的な葉月の様子を、アンサンブルで歌い上げる。満席の客席。

調理場

殺人的な忙しさをかもし出す雰囲気。葉月が入ってくる。

葉月 「メインの付け合せ、変更して」
幸大 「今さら寝言言ってんじゃねえぞ」
葉月 「安西さんがグラニテ代わりになって、つないでくれています。大至急、イチジクのソルベ出して」
暁 「えー、今、手が離せないのに。高沢」
薫 「俺は俺が二人欲しい」
暁 「里茄は？」
里茄 「担当外です」
暁 「かわいくなーいっ。音ちゃん」
音次郎 「は、はいっ」
暁 「冷凍庫から、ソルベを出してガラスの器に盛って。それでジュレを絞って、ミントの葉を乗つけて欲しいんだけど」
幸大 「見習いにやらすな」
暁 「せめて、バットを冷凍庫から出して。お願い」
薫 「切実だな、おい」
音次郎 「暁さん、これですか？」
暁 「そうそう。それをそのガラスの器に」

再び、葉月が入ってくる。音次郎が、盛り付けたグラニテを運ぶ。しかし躓いて、幸大が盛り付けていたメインの皿に、ぶちまけてしまう。

ホール

夜食の後、ソルベを食べている一同。

音次郎 「すみませんでした。僕の不注意で」
葉月 「安西さんのおかげでなんとかあったけど。こんな心臓に悪いこと、もうごめんだわ」
暁 「まあまあ」
幸大 「何がまあまあ、だ。見習いにやらすなって言っただろうが。このあほんだら」
暁 「三流ホステスがわがまま言うから、いけないのよ」
葉月 「誰が三流ホステスよ」
幸大 「とりあえず、お前はもういらない」
音次郎 「そんな」
幸大 「役に立たないならまだしも、足を引っ張りやがる」
薫 「おー、冷てえ。歯にしみる」
暁 「たった一回の失敗で、クビ？だったら私も辞めるわ」
音次郎 「暁さん」
暁 「こんなソルベよりも冷たい、狐と狸がやってるようなレストラン、もううんざり。と、その前に最後に一発だけ殴らせて」
僚介が後ろから、暁をつかんで止める。音次郎に、スープレカップを差し出す幸大。

幸大 「これと同じもの、作れ」
音次郎 「僕、陶芸なんてできません」
幸大 「器じゃねえ。飲め」
僚介 「ガルビュール」
音次郎 「がるびゅーる？」
薫 「オーソドックスな野菜スープ」
幸大 「ヒントはそこまでだ。三日間、猶予をやる。その味を再現してみる。薫、里茄、レシピを教えるんじゃないぞ」
里茄 「しません。そんな面倒なこと」
薫 「里茄ちゃん、怖え」
幸大 「もし教えたなら、フォンの中に沈めてやる」

幸大、立ち去る。葉月も反対へ去る。

里茄 「お疲れ様でした」

アイスを食べ終えた里茄、退場。

音次郎 「……」
暁 「盗んじゃえば？」
音次郎 「え？ 盗むって何を？」
僚介 「レシピを？」
音次郎 「レシピ？」
暁 「レシピを読めば、作れるでしょ」
僚介 「でもねえ。盗んだところで、どれほどのものができるかねえ、この見習い
くんに。ちよつと甘いんじゃない」
薫 「いや、俺これくらいが好き」
暁 「鬼だつて、見習いくんに完璧さを求めてるわけじゃない」
薫 「とりあえず、材料、調理法があつてれば合格点、と」
暁 「そういうこと。頼むよ、兄さん」
薫 「なんで俺、自動的に協力することになつてんだよ？ それに教えるなつて言われたし」
暁 「そ、レシピを見るなどは言わなかった。兄弟子でしょ？ 弟の不始末は兄の不始末」
音次郎 「よろしくお頼み申し上げますつ、兄貴！」
薫 「簡単に言うけどなあ」
暁 「そう、簡単。要は、あいつの部屋に忍び込んで、本棚からレシピを盗む」
音次郎 「でも、いいんでしょうか？」
薫 「もうあきらめて逃げ帰るって言うなら、止めねえぞ」
音次郎 「……」
暁 「それでいいの？」
音次郎 「よろしくお願いたします」
薫 「決行はいつ？」
暁 「まあ、幸いなことに、あの料理バカは、朝から晩まで厨房にこもってるからね」

音次郎 「じゃあ、チャンスはありますね！」
僚介 「あーあ」

音次郎のナンバー「僕は負けない」

調理場

各自、仕込みをしている幸大、暁、里茄。下手、薫と音次郎がこっそり、幸大の部屋へ向かうところ。葉月が入ってくる。

葉月 「やあね。小雨が降ってきたわ。水無月シェフ、部屋の窓、開いてるわよ。今

日のアイスは？（冷凍庫を覗く）」

「見ればわかるでしょ」

「抹茶？　なんか毒々しい色ね」

「ほうれん草。ねえねえ、閉めてきてあげようか」

「いいよ、気持ち悪い」

「何よ、人が親切で言ってるのにつ」

「いいから、手を動かせ。まだ土台じゃねえか」

幸大、行ってしまう。口笛を吹いて、合図を送る暁。薫と音次郎、あわてて走り出す。

暁 「作戦A失敗。かくなる上は、作戦B」

「無駄な努力ですね。クビの皮一枚つなげたとこで、またすぐ、何かやら

かすにきまっていますよ」

「そんなに追い出したい？」

「別に。ちまちましてて邪魔だなんて、ただそれだけです」

「ふーん」

「暁さんこそ、そんなに仁村くんを、辞めさせたくないんですか」

「だって、ちまちましててかわいいんだもの、あの子。冷凍庫に戻しといてよ」

暁、出て行く。里茄、胃の辺りを抑える。

葉月 「どうかした？」

「暑苦しい展開に耐えられなくて」

「これでも食べて気を静めたら？　ウチのパティシエール、あんな女だけど、アイスクリームは絶品よ」

器を手にも、出て行く葉月。里茄のナンバー「私の夢」。曲終わり、電話のベル。暗転。

調理場

キュイジニエたち、全員がいる。忙しそうに働いているところへ、葉月が入ってくる。

葉月 「予約が一つキャンセルになりました」

暁 「まさか、婚約祝いのカップルのところ？ 冗談でしょ。わざわざホールで作らせといて」

薫 「破局か？ 安心しろ。ケーキは俺が食ってやる」

葉月 「いいえ。片倉様のお席よ」

薫 「珍しいな」

幸大 「jeeさん、どうした」

葉月 「入院したそうよ」

音次郎 「えっ？ それで、片倉さん大丈夫なんですか」

葉月 「ええ、意識も回復して、とりあえず心配はいらないみたいだけど」

里茄 「アンクルートが無駄になりますね」

薫 「里茄ちゃんドライ」

暁 「ホント、ドライ」

葉月 「お見舞いに、アンクルートをご所望なの。コンソメのゼリーとガトーシ

ョコラも。明日持っていくから、よろしくね」

幸大 「そんなに食うのか」

葉月 「本人は至って元氣らしいわ。でも検査のために、一週間程入院するそう

よ

音次郎 「あ、あの僕も明日、お見舞い、一緒に行ってもいいですか」

葉月 「かまわないけど」

音次郎 「あ」

幸大 「好きにしろ。jeeさんも、お前の顔見たいだろ」

里茄 「パプリカのムース、上がりました」

音次郎 「いてて（葉月に耳を引っ張られる）」

葉月 「追い出される前に、更にまた、何かやらかさないでよね」

音次郎 「あ、は、はい」

葉月 「片倉さんのことが、心配なのはわかるけど」

音次郎 「はい……僕、ここにいるにも役にたたないですけど、こんなんで、片倉さん

に会いに行っても、きつと、喜んでももらえないですよ。修行って、もど

かしいものなんですね」

葉月 「調理場は、夏は地獄のような暑さ、冬は足元から凍りつくような寒さで、環境は最悪。おまけに時代遅れの階級社会で、理不尽なことだらけ。そんな世界に、自ら望んで入っていく人の気がしれない。案外、あなたあ

つてるかもよ」

音次郎 「どうしてですか？」

葉月 「だって、見るからにドMなもの」

音次郎 「葉月さん」

葉月 「はい？」

音次郎 「ありがとうございます。僕、やっぱりお見舞いにはいけません。今は、ガ

ルビュールのこと専念します」

仕事に戻っていく音次郎。葉月は、働くキュージニエたちを、しばらく眺め出て行く。

音次郎「今、僕にできることが、皿洗いだけどすれば、僕の情熱の全てを皿洗いに！！」

ロビー

薫が皿を手に、幸大を待ち伏せる。

薫 「牛ホホ肉の赤ワイン煮込み。講評、お願いします！」

幸大 「珍しいな」

物陰に暁と音次郎が隠れている。

幸大 「(味を見る) 悪くない」

薫 「え？」

幸大 「ソースも肉の柔らかさもいい。まあ、お前の場合、後はドレッシングだけ。

腕上げたな」

薫 「ちよっと待った」

幸大 「なんだよ」

僚介が無言で、カウンターに飲み物を出す。薫、幸大をストウールに座らせ、暁たちに合図を送る。

薫 「実は最近、悩んでんだけどさあ」

幸大 「な、や、み？ お前が？」

暁と音次郎、這うようにして通り抜ける。

幸大の部屋

壁一面本棚がある。暁と音次郎が忍んでくる。

音次郎 「すごい……レシビのノートだけでも、こんなにたくさん。その上、料理の本も。うわ、これフランス語。探すのも大変だあ」

暁 「ガルビュールは基本中の基本。だから、初期の頃のノートに書かれているはず。見て。ノートの背表紙にも、ちゃんとナンバー貼ってある。さすが、細かいね」

音次郎 「あった！」

ノートから一通の手紙が、はらりと落ちる。

音次郎 「手紙？」

暁 「幸大へ。花梨……(手紙を開ける)」

音次郎 「ちよっと暁さん！ いいんですか？」

暁 「『未来のシェフへ』詩？もしかしてラブレター？(歓声)」

ナンバー「変わらぬ想い」。

薫の合図が聞こえてくる。ナンバー、カットアウト。あわてて部屋を出る二人。暗転。

ロビー

暁、音次郎が戻ってくる。

音次郎 「高沢さん、どうしたんですか」

僚介 「(飲み物のお代わりを出す) アカデミー賞ものの、名演技に」

薫 「それで？」

誇らしげにレシピを掲げてみせる音次郎。

薫 「おー。じゃあ、あとは再現するだけだな」

僚介 「それが一番の問題だと思っけどね」

音次郎 「がんばってみます。ご協力ありがとうございます」

音次郎、退場。葉月がやってくる。

葉月 「水無月はもう、部屋にいるのかしら」

暁 「知らない。随分、楽しそうね」

葉月 「そういうあなたは、ご機嫌ななめね」

暁、カウンターに手紙を置く。ハッとする葉月、僚介。

暁 「花梨って誰……？」

音楽フェードイン。暗転。

森の中

真夜中。幸大と花梨の哀しいデュエット。葉月が幸大を探しに来る。花梨、静かに消える。葉月が走ってきて、幸大を突き飛ばす。

幸大 「お前……何すんだ！」

葉月 「……」

幸大 「また迷いこんでも知らないぞ」

葉月 「あなたこそ。花梨はもう……ここにはいないわ」

幸大 「……」

葉月 「明日、佐久間様から予約が入ったの。仕入れ、よろしくね」

幸大 「熱心だな。二言目には、店たたむって言ってるわりには」

葉月 「佐久間さんは、IT企業の社長よ。しかも独身。見た目もまあまあ。労力を払うだけの価値はあるわ」

幸大 「そうか」

葉月 「おやすみなさい」

葉月、退場。

幸大のナンバー。「変わらぬ想い」

調理場

試作をしている音次郎。葉月がやってきて、音次郎に飲み物を渡す。

音次郎 「葉月さんは、子供のころからここで育ったんですか」

葉月 「まさか。ここは、父が東京の店を手放してまで開いた、思い入れ、というか怨念がこもった店なの。母は大反対。わざわざ、こんな人里離れた場所にレストランを開くなんて、正気の沙汰とは思えない。行きたかったら一人で行けばいいってことで、母と私はそのまま、東京に残った。父

が病気になって、この店は一度閉めてるのよ。父は遺産として、私にこ
こを残したの」

音次郎 「お父さんはどんな方だったんですか？すばらしい料理人だったんでし
ょうね」

葉月 「単なる遊び人よ。母にとっては何」

音次郎 「でも葉月さんは、お父さんの意志を継いだんですね。すばらしい」

葉月 「うっとうしいこと言うのね。そうじゃないのよ。面倒だから、水無月に譲
るつもりでいたのよ」

下手、幸大が登場。

幸大 「いらねえよ。お前がやればいいだろ」

葉月 「私？ 私に何ができるのよ」

幸大 「やりたいようにやれ」

葉月 「それで？」

幸大 「調理場は俺が預ってやる」

葉月 「私は料理のことも、経営のことも知らないわ。モンレーブは一度、店じま
いしてるのよ。スタッフだっていない」

僚介 「オーベルジュをやらないかって。いいよ、二、三年くらいなら」

暁 「悩みどころだなあ。パティシエールより、キャバ嬢の方が稼げそうだし
ね」

葉月 「本当に、私は何も知らないのよ」

三人 「だったら一から始めればいい」

葉月 「……」

音次郎 「おお、いい話ですわえ」

葉月 「君も今は料理人なのよね、一応」

音次郎 「見習いですけど」

葉月 「料理は才能。そして、才能は人格でのみ、磨かれる」

音次郎 「……」

葉月 「父の口癖よ」

音次郎 「すばらしい！！」

葉月 「父のことを思い出しても、そんなところは見当たらなかったわ。水無月
を見ていても。高沢。里茄。それから暁。彼らを見るたびに、疑問が増す
ばかりよ。そしてきつとあなたも。私を悩ませるわね、見習いくん」

葉月、退場。暗転。

ホール

ドラマロールの中、音次郎にスポット。

音次郎 「できましたっ。ガルビュール！」

ぞろぞろと、幸大、僚介、薫、暁、里茄が集まってくる。

幸大 「約束は覚えてるか」

音次郎 「はい」

幸大 「覚悟はできてるんだろうな」

音次郎、器を差し出す。

幸大 「(一口飲む) ……」

音次郎 「どうですか？」

幸大 「自分で飲んでみる」

音次郎 「(一口飲む) 極めて、薄い気がします。途中、煮詰まって水、足したんです」

幸大 「お前の人生そのものだな。煮詰まった挙句、窃盗か」

薫 「なんでばれたんだ？」

音次郎 「しまった。レシピを返しておくの、忘れてました」

薫 「アホすぎ」

幸大 「お前も共犯か」

薫 「言い出したのは暁だからな」

僚介 「無責任すぎるんじゃないの？」

幸大 「なんだと？」

僚介 「一度預かった弟子なら、最後まで面倒見る。育てかねるって言うなら、お前の器がそこまでってことだな」

幸大 「片倉のじじいみたいなこと言いやがって」

音次郎 「あのっ、お願いします。僕、努力しますから。頑張って一人前の料理人になりたいんです。むぐっ」

音次郎、幸大に顔を掴まれる。

幸大 「料理人っていうのはな、自分の目と舌で盗むもんだ。今度姑息なマネしやがったら、冷凍便で家に送り返すぞ」

音次郎 「ありがとうございます！」

里茄、無言で調理場へ。音次郎と薫も退場。暁からレシピを受け取る幸大。挟まっていた手紙を見つける。

幸大 「読んだのか」

暁 「バカにしないでよ」

幸大、退場。入れ替わりに葉月がやってくる。

僚介 「全然ダメ」

暁 「何が」

僚介 「天邪鬼な態度じゃ落ちないって。あいつは所詮、一面倒見のいいSだよ。『頭撫でて、かわいがって』って子犬のようにまとわりつかれると、拒否できない性格なんだから。お帰り」

葉月 「どうやら、首がつながったみたいね。悪運の強いこと」

暁 「それはどうか。この店の外に、数え切れないほどの幸せがあるかもよ」

葉月 「同感」

僚介 「片倉さんの様子は？」

葉月 「来週には退院できるそうよ」

僚介 「そう。大事に至らなくて良かった」

葉月 「週に三回も、食事に来てくれてたから。なんだかんだ寂しいわね。早く元気になってほしいわ」

暁がポケットに止めていたタイマーが鳴る。

葉月 「ガルビュール……花梨の好きなスープだわ」

暁 「水無月が、毎晩おかしいのは……その、花梨のせいなの？」

葉月 「ねえ」

暁 「もう、いい」

暁、退場。

僚介 「おめでとう。ライバルが減ったね」

葉月 「あっちもこっちもけしかけて、めちやくちやな人」

僚介 「誰か一人が幸せになれば、その幸せが伝染するんだよ。誰と誰がくつつこうが、結果オーライならそれでいい」

葉月 「安西さんが言うのと、そうかもって、うっかり騙されそうになるわ。でもあなた、一つ間違ってる。私、料理人の男になんか、興味ないの。(スープを飲む) 薄い」

葉月、退場。

僚介 「素直じゃないね」

舞台、下手に暁の姿。音次郎が駆け寄ってくる。上手に幸大の姿。

暁 「最初から負けてたわ。出会った瞬間、呼吸が止まった。私の心臓は、彼のものになった」

音次郎 「暁さん」

暁 「音ちゃん。ねえ、ガルビュールもできたしき。今日こそ遊びに行こうよ」

音次郎 「どこへ？」

暁 「ものすごーく、勉強になるところ」

幸大 「……」

薫がやってくる。薫を捕まえる幸大。

薫 「なんだよ」

幸大 「お前、今晚付き合え。お前の好きそうなところに連れてってやる」

葉月が佐久間を見送っている。葉月を抱きしめる佐久間。照明フェードアウト。

クラブ

ナンバー「暁」。楽しそうに踊っている客たち。音次郎が一人でいる。そこへ、眼鏡やサングラス、鬘などで変装した、幸大と薫がやってくる。カウンターで飲み物を受け取る二人。音次郎がやってきて、顔を覗き込む

音次郎 「水無月シェフ？ 高沢さん？ どうしたんですか？ その格好」

幸大 「暁は？」

音次郎 「それが、飲みすぎたって化粧室に」

幸大 「まったく、あいつは」
薫 「なあ、俺の好きそうなどころって言うから、キャバクラにでも連れてってくれるのかと思って、めっちゃ期待したんだけど」
幸大 「俺もそう思った」
薫 「は」
幸大 「またあいつ、よからぬ店で、バイトでも始めたんじゃないかと思って」
音次郎 「それで心配してきたんですか？ わざわざ変装までして」
女客1 「ねえ、踊らないの？」
薫 「なんていい店だ」

薫が嬉しそうに手を引かれて行く。

女客2 「ねえ、お兄さんたち」
幸大 「寄ってくんないな」
音次郎 「すみません。ちょっと気が立ってて」
女客2 「君、かわいい。踊らないの？」

女客2、半ば強引に、音次郎をフロアに誘い出す。やがて、赤いドレスに身を包んだ暁が、姿を現す。フロアにいる男を品定めするように、一通り、組んで踊った後、薫と組む。見かねた幸大が暁の手を引く。曲がスロ―に変わる。幸大、仕方なく暁と踊る。

暁 「そんなものかけてて見えるの？」
幸大 「直に見るとかわいすぎるから、これくらいでちょうどいい」
暁 「(幸大にもたれかかる)」
幸大 「……酔ってる？」
暁 「ものすごく酔ってる。ねえ、お兄さん、なにやってる人？」
幸大 「えっ!？」
暁 「聞いちゃいけない？」
幸大 「……作る仕事、ていうか」
暁 「もしかして陶芸とか？」
幸大 「そんなカンジ」
暁 「私も。お菓子作ってる」
幸大 「へえ」
暁 「調理場にこもって、朝から晩までこねたり、かき混ぜたり、焼いたり」
幸大 「……」
暁 「変わった人だね。普通、女性なのに大変なことしてるね、とか、かわいいのにもったいないね、とか、お世辞でも言ってくれるもんなんだけど」
幸大 「だって、好きなんだろ。パティスリ……お菓子作るのが」
暁 「私ね、好きな人がいるんだ。全然、気づかれてないけど。フランスから帰ってきて、こつちで働いてみたけど合わなくて、全然楽しくなくなっただ。そのうち、お金もなくなってきた、キャバで働いて、そしたら、その人が迎えに来てくれた。『お前、何やってんだ』って。私、嬉しくて」
幸大 「……」

歓声。女性客にもみくちやにされている薫と、音次郎。髪とサングラス

を奪われる。

「高沢っ!？」

暁、幸大にゆつくりと視線を戻す。幸大のサングラスを外す。それを床に叩きつけ、走り去る。

幸大 「暁!」

客たちをかき分け、幸大、暁の後を追う。

森の中

幸大が暁を追ってやってくる。

幸大 「暁!」

「触らないですよ! なによ。人のこと騙して楽しい?」

幸大 「普通、気づくだろ。どれだけ無防備なんだ、お前」

暁 「一夜限りの相手の素性なんて、どうでもいいよ」

幸大 「……」

暁 「何よ。私の言ってることが気に入らないなら、オーナーに言ってクビにすればいいでしょ。こんな適当な、墮落した女を調理場に入れたくないって言うなら、喜んで辞めさせていただくわ」

幸大 「いいかげんにしろ」

暁 「(幸大をひっぱたく)」

幸大 「てめえ、何すんだ!」

暁 「保護者にでもなったつもり? 高沢まで連れて」

幸大 「いや、心配だったから」

「心配なんてしてほしくないよ。自分のことは何一つ教えないで、締め出して。なのに自分は、土足で私の人生に入りこんでくる。ずるい! この最低男!」

思わず手を振り上げる幸大。ためらう。暁が幸大の頬を叩いて、走り去る。

幸大 「二度も殴るか、普通」

僚介の部屋

僚介が女性と抱き合っている。窓から葉月が入ってくる。手にはワインのボトル。女は驚き、窓から出て行く。

僚介 「ドアから入ってきたさいって」

葉月 「自分だって、窓から女引き入れたくせに。ねえ、聞いて。この店には私が

思ってたよりも、ずっと価値があるわ。この辺一帯の開発が進んでる。今の内に買い取って一儲けしたいって、佐久間さんに結婚を申し込まれたわ。ステキなプロポーズでしょ」

暁が窓から入ってきて、ベッドに身を投げる。

葉月

「どうしたの？ 水無月たちと一緒に、出かけてたんじゃないの？」

暁

「水無月なんて何よ。あいつがフランスで、適当な女に、適当に手を出してたことだって、私知ってるんだから。それなのに」

僚介

「暁」

暁

「水無月のことが好きだって、バレた」

僚介

「……」

暁

「この店にはもう、いられない」

暁、声押し殺して泣く。僚介のナンバー。「羽を休めて」

ロビー

バーカウンターで幸大が一人、飲んでいる。僚介がやってくる。

僚介

「一杯寄せ。とんだとぼっちりだ」

幸大

「暁は？」

僚介

「泣きつかれて眠ったよ」

幸大

「……」

僚介

「お前の、そんな面が拝めるとは思わなかった」

幸大

「……」

僚介

「幸大、本当は気がついてたんだろ」

幸大

「俺は……あいつの気持ちを利用した」

僚介

「……」

森の中

午後。一人歩く里茄。善直が秘書の堀を伴い、やってくる。

善直

「やあ。こんにちは」

里茄

「片倉さん。退院されたんですか」

善直

「久しぶりだから、森の中を歩いてみたくなってね。君もかい」

里茄

「私は……歯医者です」

善直

「そうかそうか」

里茄

「なんです？」

善直

「あ、いやいや、失礼。日本人も随分、体格が良くなったなあ、と思ってね。」

里茄

「食べてるものもいいのかな、やはり」

善直

「遺伝かもしれません。両親も背が高いので」

里茄

「なるほど。ご家族は今どちらに？」

善直

「東京ですけど。そんなこと聞いて楽しいんですか」

里茄

「おしやべりは嫌いかい？」

善直

「時間を無駄にしたくないんです」

里茄

「そうか。今時、感心な子だ」

善直

「コミュニケーション能力に欠けてるって、よく言われます」

里茄

「毎日毎日、自分の腕をひたすら磨いて、誰かを喜ばせる。これはコミュニケーションションとは言わないのかい？」

善直

「……」

里茄

「私はこうして、話すことでしか人と関われないが、君には料理がある。料

「理で人を幸せにできる。すばらしいことだ」

里茄 「私の父も、料理人なんです。今も、都内のホテルの厨房で、副料理長をしています。私が小学校に上がる前に、両親は離婚しました。私は母と暮らすことになりました。父にはすぐに、新しい家族ができました。中学二年の秋に、母は事故で左半身の自由を失いました」

善直 「……お気の毒に」

里茄 「私は父に引き取られました。その家には、新しい母と妹がいて、今日から家族になるんだって言われたけど、私にはさっぱり理解できませんでした。だってどう考えたって、私はよそ者で……」

里茄、よろける。堀が駆け寄ってくる。

善直 「大丈夫かい？ 車を」

里茄 「大丈夫です」

善直 「しかし、顔色が悪い」

里茄 「病気じゃありませんから、あなたと違って。妊娠したんです」

善直 「……」

里茄 「でも産むつもりはありません。くだらない話をしてすみませんでした。お大事に」

里茄、退場。

調理場

幸大が一人、仕込みをしている。暁が入ってくる。調理台の上の、籠に山盛りの林檎を見つける。一つ、林檎を手に取る。

幸大 「シブーストを作ってくれないか」

暁 「いやだって言ったら？」

幸大 「頼む」

暁 「……いいよ。これで最後かもしれないしね」

幸大 「……幾つになった？」

暁 「覚えてないの？」

幸大 「会ったのが二十一、三歳だったか。俺の中では、そこで止まっているからな」

暁 「じゃあそこで止めといてよ。無理か。もう、二十七。失礼な男ね」

幸大 「ごめん」

暁 「どうしたの？ 熱でもあるんじゃない？」

幸大 「お前の言うとおりだなって思ってたさ。何も話さないでいたこと」

暁 「もういいって。聞いたって今さら……一つだけ。花梨は今でも、あなたの恋人なの？」

幸大 「……ああ」

暁 「結婚する時は教えて。畳一畳サイズの、ウエディングケーキをプレゼントするわ」

間。

幸大

「俺、実はショックだったんだ。エトワレットブルーで、お前に会った時。シエフ・パティシエは見るからに神経質な男で、朝から晩まで、甲高い声が調理場に響いて。デセール担当の奴らも、みんなピリピリしてたのに、その中でお前だけ、緊張感の欠片も感じられなくて、驚いた」

幸大 暁

「ケンカ売ってんの……？」

「知ってる人間が一人もない、言葉の通じない国に行っても、俺は絶対誰にも負けねえ。そう思ってた乗り込んだのに、お前は、日本人だからとか、フランス人だからとか、男とか女とか関係なく、自分のやりたいようにやってるように見えて、正直うらやましかった」

「……」

幸大 暁

「お前の作るデザートって、お前そのものだな。天衣無縫で、軽くて、ちょっとかわいい。しかもまだ、のびしろがある」

幸大 暁

「その通りだ。こんな男のために、自分の才能をダメにするな」

暁が振り上げた手を受け止める幸大。

幸大 暁

「三度も殴る気かよ。なんて女だ」

「なんて男なの。ちゃんとやってよ。『金輪際、俺の前から消えろ』って。言ってるよ！」

すすり泣く暁。幸大、ただ見守る。

ロビー

僚介と葉月がいる。暁が皿を手にとってくる。

暁 葉月

「シブースト、いかが」

暁 葉月

「ご馳走様」

暁 葉月

「それで。結局誰なの、花梨で」

暁 葉月

「友達よ。花梨は私の友達だった」

暁 葉月

「へえ、葉月にも女友達がいたんだ」

暁 葉月

「あの子は特別よ。きれいで優しくて」

暁 葉月

「葉月と友達になれるんだもん。そりゃいい子だわ」

暁 葉月

「高校三年の夏休み、初めてモンレーブに遊びに来たわ。花梨は子供のころからここに住んでいて、友達になったの。それから、私は休みのたびに、ここへ遊びに来るようになった。父には止められたけど、よくあの森を散歩した。ある時、花梨と二人で森の中に行ったら、急に天気が悪く、霧に包まれたことがあった。私は、花梨とはぐれて、なんとか自力で戻ってきた。森の外には、父や、レストランの人たちや、捜索隊がたくさんいた。ひどい霧だったわ。私が帰ってこられたのは、奇跡だって。それなのに、花梨はまだ森の中にいるって聞いて、たった一人で森に走っていく人がいた。それが水無月だった。明け方近くになって、花梨がようやく戻ってきたわ。水無月の腕に抱かれてね」

「……」

暁 葉月

「私が水無月を見たのは、その時が初めてだった。周りが止めるのも聞かないで、花梨の下へ走る姿」

葉月 暁 「で、花梨は今、どこにいるのよ」
「遠いところにいるわ。もともと心臓の弱い子で、最期は、ロウソクの火が消えるように、静かに息をひきとったわ。それからすぐ、水無月はフランスへ渡った。五年間、一度も帰ってくることはなかった」

葉月 暁 「でも帰った。あなたの下へ」
「水無月は、今でも夜になると、花梨の姿を探してる。バカみたい。もう、一生会えないのにな」

葉月 暁 「……」
「ごめんさい。ちゃんと言えよよかったわね。花梨のこと」

葉月 暁 「別に。恋敵に塩を送る必要はない」

葉月 暁 「水無月が誰かに恋するなんて、きつともうないわ」

葉月 暁 「どうか。想い出は確かにきれいだけど、男にとつて、生身の女は必要じゃない？ どうなの、安西先生」

葉月 暁 「(グラスワインを差し出す)」

葉月 暁 「メルシー」

葉月 暁 「じゃあ、どうしてあきらめたのよ」

葉月 暁 「あきらめたんじゃないの。悟ったの」

葉月 暁 「一応聞くけど、悟ったって何を？」

幸大が姿を現す。

暁 「もちろん、溢れるような才能に。何しろ私には、まだまだのびしろがあるのよ」

幸大 僚介 「言いかえりや、まだまだ半人前ってことだよ。この愚か者が」

幸大 僚介 「おっと、最低男のお出ましだ」

幸大 僚介 「いつだって突然現れるのね。ストーカーみたい」

幸大 僚介 「口の減らない女だな」

暁のナンバー「変わらぬ想い／＼花梨の手紙」。

幸大 「お前……やっぱり読んだんじゃねえか」

逃げる暁。やってきた薫とぶつかる。

薫 暁 「おっと」

薫 暁 「あ。いいもの持ってるな」

薫 暁 「いいでしょ。まだ残ってるよ」

薫 暁 「じゃ、これから一杯やらない？ 俺、なんかつまみ作る」

薫 暁 「やったあ。じゃ、音ちゃんも誘おう」

薫 暁 「いや、あいつはいいんだって」

暁、行ってしまう。

僚介 「なに。その、残念そうな顔」

薫 「今まで、コックコート着たところしか、見たことなかったからさ。案外いい足してんだよな、あいつ」

僚介 「あーあ」
葉月 「いつの間にこんな面倒なことになったの？」
僚介 「昨日の夜から？ まあ、他でもない、こいつのせいなんだろうけどね」
幸大 「……」
葉月 「後悔してる？」
幸大 「確かに、いい足してるけどな」
葉月 「モンレーブに戻ってきたことよ」

僚介の合図で照明が一段、暗くなる。暁の笑い声。再び、明りが戻る。ソファで薫と暁が飲んでいいる。音次郎がカウンターで酔いつぶれている。

薫 暁 「お前、本当によく笑うよな。そういうとこ俺、好きかも」
暁 「えーと。本気じゃないでしょ」
薫 「結構、本気で」

薫 暁 「昨夜の私だったら、最初に声をかけてきた男に、勢いでついてったかもね。私、水無月のことずっと好きだったんだよ。ふられたけど。そういうのどーなの？」
暁 「別に気にしないけど」
薫 「最後にこれだけ。私あなたより年上」
暁 「あー、四コ上だっけ？」
薫 「(手を広げて見せる)」
暁 「気になる？」

薫に抱きつく暁。そのままソファに押し倒す。

暁 薫 「心が広い？ 単なるバカ？」
薫 「おい」
暁 「でも、バカって貴重」

薫に身体を寄せる暁。カットアウト。

ホール

僚介と葉月が、テーブルで仕事をしている。薫が上機嫌な様子でやってくる。

薫 「おーっす」
葉月 「……(無言で見送る)」

今度は暁が上機嫌な様子でやってくる。

暁 「おっはよう」
僚介 「ご機嫌だね」
暁 「そう？ 何やってるの？」
僚介 「メニューの下書き。来週から九月だからね」
暁 「もう秋なんだね。秋は食材が豊富だよな。果物も。買い物に行つてこようかな」

僚介 「ついでに洗剤、頼んでいい？」
暁 「いいよ。行ってきまーす」
僚介 「今夜は雨かな」
葉月 「あの切り替えの早さ、と言ったらまあ……」
僚介 「水無月もいつか、花梨を忘れる日が来ると思う？」
葉月 「……なに、それ」
僚介 「葉月の心の声」
葉月 「水無月が花梨を忘れられないように、私も彼女を忘れられない」
僚介 「どうしてあいつは、料理を作る？」
葉月 「……」
僚介 「愛情が有り余ってるから。ここに（胸に手をあてる）」

調理場

幸大と薫、里茄、音次郎が仕込み中。

幸大 「ボルドレーズは？」
薫 「終わった」
幸大 「ラヴィゴットは？」
薫 「それも終わった」
幸大 「ラタトゥイユは温かいまま出せ」
薫 「おう？」
幸大 「今夜は雨だ」
薫 「あのさ、幸大。俺、あいつとつきあってもいいかな。デセールの妖精」
幸大 「暁にはなんて？」
薫 「これと言って何も言わないけど、実は昨日から、唐突に盛り上がってる」
幸大 「ふーん。それじゃ、また俺はあいつに恨まれるな」
薫 「え」
幸大 「来月、フランスへ飛べ」

里茄が出て行く。

薫 「はあっ？ 冗談だろ！？」
薫、暁の元へ走る。買い物袋を下げて戻ってきた、暁の両肩をつかみ、幸大の言葉を告げる。暁、薫を突き飛ばして走り出す。僚介を捕まえる。後から薫が追いついてくる。

暁 「どこまで私の幸せ邪魔したら、気がすむのよっ」
僚介 「なぜ俺に言う？ しかも胸倉つかんで」
薫 「暁！」
暁 「……」
薫 「結婚しよう」
暁 「は？」
薫 「もちろん、今すぐじゃないけど。俺、料理人として一人立ちできるように頑張るし、そしたら」
暁 「ちよっとやめてよ。なに、真面目になってるの。あんた、そんなキヤラジ

薫 やなかつたじゃない……って行くつもりなの？ フランスへ」
「……」
暁 「はい、洗剤。はい、領収書」
僚介 「ありがとう」
薫 「暁」
暁、とぼとぼと退場。

ロビー

具合の悪そうな里茄。暁、皿に山盛りのシュークリームを食べている。
葉月がやってくる。

葉月 「里茄。里茄、ちょっと待って」
里茄 「……」
葉月 「片倉さんから聞いたわ」
里茄 「とんだおしゃべりじじいですね。私がバカでした」
葉月 「聞いてしまった以上、このまま働いてもらうわけにはいかないわ。もしものがあつたらどうするの？」
里茄 「かまいません。誰かに責任をとってもらおうなんて、思ってませんから」
葉月 「バカ言わないで！」

ソファの向こうで幸大が身体を起こす。

葉月 「いるならいるって言いなさいよ！」
幸大 「お前のキンキラ声で、目が覚めたんだよ」
里茄 「水無月シェフ。もし高沢さんが迷ってるなら、私をフランスに行かせてください」
葉月 「なっ、むちゃくちゃだわ、あなた」
里茄 「私には夢があるんです。オーナーだって、暁さんだって、仕事なんか適当じゃありませんか。適当に仕事して、適当な男見つけて、適当にいい暮らしができれば、それでいいんですよ？」
暁 「テキトー」
里茄 「でも私は違う。一流の料理人になりたいんです。それ以外にやりたいことなんてない。どんなに好きな人でも夢を奪われたくない」
幸大 「子供はどうする」
里茄 「堕ろします」
幸大 「滅多なこと言うんじゃない」
里茄 「水無月シェフは、自分が恋人を亡くして、命に執着してるだけです」
幸大 「ちよつと待て。誰から聞いた？」
里茄 「誰もが知ってる情報ですよ。とにかく、自分の価値観を押し付けなくてください。私は自分の夢が一番……彼だって私に、この子を産んでほしいなんて、思っていないのに」
葉月 「彼がそう言ったの？」
里茄 「いいえ」
幸大 「子供のこと、教えてないのか」
里茄 「教える必要がありますか」

葉月 「……不倫？」

里茄 「いいえ。湖畔にある、ホテルの社長の子倅です。独身ですけど、子供ができたなんて言ったら、自分の将来のために産まないでくれて、多分土下座してくれると思いますよ」

幸大 「もう調理場には入るな。命令だ」

葉月 「横暴ね」

幸大 「なぜ俺をにらむ」

葉月 「腹立たしいからよ。男はずるい。いつだって、最終的な選択を女に押し付けて、罪悪感を抱かせる」

幸大 「ろくでもない男を選んだ報いだ」

葉月 「仕方ないでしょ。この地球上には、ろくでもない男しかいないんだから！」

幸大 「今は里茄の話をしてるんだ！」

里茄 「手術は来週の日曜日です。入院の必要はありませんし、これ以上のご迷惑はかけません」

里茄、退場。

幸大 「誰か金八呼べ。説教させろ（再び横になる）」

葉月 「仁村くん、いる？」

音次郎 「はい、呼びました？」

葉月、音次郎に用事を言いつけてる様子。戸惑う音次郎を送り出す。夕方。照明チェンジ。

僚介 「臆病だね」

暁 「私？」

僚介 「愛されないと寂しくて耐えられなくせに、男が本気になったとたん、逃げ出す」

暁 「もう黙ってよ」

僚介 「……」

暁 「どうしたらいい？」

僚介 「あいつなんか、フランス行ってる間に、心変わりするに決まってるじゃない。今、裏切られたら、私死んじゃう」

薫 「安心しろ。その時は俺も一緒に死ぬ」

薫が、カウンターの向こうから突然顔を出す。

暁 「アホだ、この男」

音次郎が北田を連れて、玄関から入ってくる。

里茄 「北田さん。どうしてここに？」

北田 「子供ができたって、本当なのか」

里茄 「仁村くん」

葉月 「私が頼んだのよ」

里茄 「葉月さん」

葉月 「おせっかいは性に合わないけど、ちゃんと二人で話し合うべきだと思う
たから」

里茄 「……産まないから。仕事だってあるし、私には時間がないの」

北田 「……」

里茄 「なんとか言いなさいよ」

北田 「え？」

里茄 「何のために来たの？ もう帰ってよ」

北田 「里茄」

里茄 「帰って」

北田、退場。

音次郎 「里茄さん、本当は産みたいんじゃないですか」

里茄 「一度休んだら、もう戻れないかもしれない。大切なチャンス逃すかも
しれない」

葉月 「また戻ってきたらいいじゃない。オーナーは私よ。水無月に文句は言わ
せない」

里茄 「例の、IT企業の社長はどうするんです？ 歯科医は？ CMディレク
ターは？ ずっとここを続けるわけじゃないんでしょう」

里茄、退場。気まずい雰囲気。他の者も去る。最後まで残るのは暁と薫。

暁 「悪阻ってこんなカンジかな」

薫 「里茄が……意外だったな」

暁 「みんな、何かしら事情を背負ってるわよ。ま、中にはあんたみたいな、見
た目どおりの、底のあっさい男もいるけどね」

薫、後ろから暁のウエストをつかむ。

暁 「ちょっと。あんたの顔に吐くわよ」

薫 「なんか俺、幸大の気持ちがちよつとわかった。放っておいたら、こいつど
うなるんだって……ものすごく不安になる」

暁 「どうにもならないよ。もう行くなって決めたんでしょ」

薫 「ああ」

薫のナンバー。「約束」

ホール

美女に囲まれている善直。ご満悦の様子。

葉月 「退院おめでとうございます（バスケットに一杯の花束を、テーブルに置
く）」

善直 「ありがとう。ありがとう。音次郎くんはどうだい？ 頑張ってるかい？」

葉月 「ええ。毎日怒られながら」

善直 「ありがとう、葉月さん」
葉月 「私は見ているだけです。何ができるわけでもなく、ただ見てるだけ」
善直 「……」
葉月 「あ、ごめんなさい。今夜はどうぞ、ごゆっくりなさってください」

ロービー

善直が、美女たちを連れて出てくる。笑い声。堀がやってくる。

善直 「堀くん。彼女たちを、先に送ってくれないか。葉月さん、すまないが、少しここで、休ませてもらってもいいかい」
葉月 「ご気分が悪いんですか？」
善直 「いやいや。あんまり楽しくて、はしやぎすぎただけだ。堀くん、頼むよ」
堀 「では、すぐ戻りますので。上原さん、よろしくお願いします」

堀、美女たち退場。善直、ソファに座る。

葉月 「本当に大丈夫ですか。何かお飲みになりますか」
善直 「もう、たくさんいただいたよ。わがママを言つてすまないね。もう少し、この余韻に浸っていたいだけなんだ。今夜は、すばらしい夜だった。ありがとう」

葉月 「……」
善直 「繋いでるのは君じゃないかね」
葉月 「え？」

善直 「これだけはどうしても、言っておきたくてね。お父さんと水無月くんを繋ぎ、お客さんと料理人を繋いでいるのは、葉月さん、君なんだよ。知ってたかい？」
葉月 「片倉さん。仁村くんを呼んできますわね」

葉月、退場。善直、満足そうな表情で目をつぶる。間。音次郎の声。音次郎が姿を現す。

音次郎 「片倉さーん。こんなところで寝ちやってるよ。片倉さん？」
善直 「……」
音次郎 「片倉さん！」

善直を揺する音次郎。動かない。暗転。

調理場

幸大が一人、仕込みをしている。憔悴した様子の子の葉月が、入ってくる。

葉月 「まだやってるの？」
幸大 「ゴールデンタイムを逃してるぞ」
葉月 「今夜は眠れそうにないもの。精神安定剤を盗みに来たの」
幸大 「水無月シェフ……お願いがあるのか」
葉月 「どうした。熱でもあるのか」

葉月 「里茄には、後悔してほしくないの。だから」
幸大 「……お前の思う通りにしろ」
葉月 「ありがとうございます（深々と頭を下げて）」
間。

幸大 「後悔してるのか、お前は」
葉月 「後悔してるのはあなたでしょ。帰ってこなければよかったって、思ってるんでしょ」
幸大 「だとしても、お前が嫁に行くまでは続けてやるよ……葉月？」
葉月 「（泣いている）なんでもない」

出ていこうとする葉月。その腕を幸大がつかむ。

葉月 「ちよつと疲れただけ……スープのせいよ。あなたの料理は、いろんなことを思い出させるの」
幸大 「……」
葉月 「それで、すぐく頭にくる」

葉月、腕をふりほどき出て行く。

北田 「電話のベルの音。思いつめた様子の里茄、電話をかける。舞台の反対側、電話に出る北田。」
北田 「はい……もしもし？……里茄？」
里茄 「産むことにしたの」
北田 「前に話した、夢の話覚えてる？」
里茄 「話した相手、私じゃないんじゃない？」
北田 「いつか、北海道で小さなペンションをやるんだ。その土地で取れる食材を使った、美味しい料理。一日の始まりは、シェフの焼いたバケットと、バターと、コーヒートの匂い」
里茄 「……言つとくけど、当分北海道には行けない。水無月シェフから盗みたことが、まだまだたくさんあるから。オーナーとシェフがオーケーしてくれた。このままぎりぎりまで働いて、子供を産んだらすぐ復帰する」
北田 「僕も応援するよ」
里茄 「ありがとう」

里茄、電話を切り退場。少し遅れて、北田も。

森の中

葉月のナンバー。「幸せへの戸惑い」花梨の魂が見守るように、踊る。やがて花梨は、葉月をいぎない、幸大の下へと導く。

ホール

閉店後。葉月と僚介が片付けをしている。

葉月 「まさか、先を越されるなんて」

僚介 「葉月もウェディングプラン、急がないとね」

葉月 「そうね」

僚介 「俺にも先を越されるよ」

葉月 「どういうこと？」

僚介 「最初に二、三年で言っただろ」

葉月 「ええ。でもどうしてなの？」

僚介 「稼業を継ぐ予定なんだ。金沢の造り酒屋。結婚相手も、もう決まってる」

葉月 「その人のこと」

僚介 「好きになれると思うよ。だけど、彼女のことが必要ならば俺、葉月のこと好

きになってたかもね」

葉月 「……」

僚介 「冗談」

葉月 「みんな、ここから去ってくのね」

僚介 「片倉さんに感謝だね。音次郎を送り込んでくれた」

葉月 「里茄が産休に入るまでに、少しはモノになってくれるかしら」

僚介 「そうだね」

葉月 「安西さん、私」

突然、照明が落ちる。

葉月 「やだ、停電！？ 安西さん？」

葉月、手探りで僚介の腕を掴む。

葉月 「いつまでも、このままじゃいられないわね……安西さん……私も、決め

たわ。水無月のことはもう、あきらめる」

間。

葉月 「安西さん？」

クラッカーとシャンパンの栓を抜く音。悲鳴を上げる葉月。薫がロウソクを灯したケーキを持つてくる。葉月、自分が掴んでいたのが幸大であることに気づく。「Happy Birthday」の合唱。スタッフ全員、善直、堀たちもいる。

葉月 「なによ、これ……脅かさないでよ！ あんたたちと違って、ガラスの心

臓なのよ」

薫 「ぎやはは。こいつ泣いてる」

葉月 「片倉さんまで。また倒れないでくださいね」

善直 「ほっほっほ」

薫 「本当に、しぶといじいさんだよなあ」

音次郎 「高沢さん」

善直 「音次郎くんが、一人前になるのを見届けるまでは、まだまだ」

暁 「今回は調理場全員の合作」

音次郎 「僕も、卵割りました」
里茄 「担当外でしたけど」
暁 「それで？」
薫 「幾つになっただよ」
葉月 「さっさとフランスへ行きなさい」

各自、グラスを取る。雑談の雰囲気。
幸大と葉月の目が合う。

幸大 「おめでとう」
葉月 「……あの」
幸大 「俺は後悔してない」
葉月 「水無月」
幸大 「五年間ためらい続けた。あいつがずっと、ここで泣いてるんじゃないかって」
葉月 「花梨は、いつでも笑ってたわ」
幸大 「ありがとう」
葉月 「……」
幸大 「帰ってきてよかった」
葉月 「(シャンパンを飲み干す) ……あの、さっきのは別に」
音次郎 「葉月さん、ケーキはどうですか？ 美味しっ……痛っ！」
音次郎、薫にはたかれる。

葉月 「——深い意味はないから」
幸大 「安西さん……私も、決めたわ。水無月のことはもう、あきらめる」
葉月 「……」
幸大 「わかりづらいな、お前」
葉月 「……」
幸大 「料理人の男なんて、て言っただろ」
葉月 「言ったわ。だって、どんなものか、嫌ってほど知ってるもの」
僚介 「知ってる？ 昔々、女性はワインを飲むことができなかったって」
葉月 「腹立たしい話ね。酒がまずくなるわ」
幸大 「僚介」
僚介 「留守中、自分の妻が、ワインを盗み飲みしなかったかどうか」
幸大 「ちよっと待て」
僚介 「男はどうやって調べたと思う？」
幸大 「こいつの親父、めっちゃくちゃ怖えんだぞ」
葉月 「あなたにも怖いものがあるなんてね」
葉月、二杯目のシャンパンを飲み干す。

幸大 「早く消せ」

ワケがわからない様子の葉月、ロウソクを吹き消す。戻ってきた明りの中、幸大が葉月にキスをしている。

僚介 「それがキスの始まり」

一同の歓声に包まれる。ナンバー「夢の続き」暗転。

旅立つ支度を整えた薫。幸大が来て、包んだナイフを渡す。

薫 「俺にできるのかな」

幸大 「……」

薫 「今さらって思ってたんだろ。けど俺は、ダメな自分をよく知ってるから。ちくしょう、怖えよ」

幸大 「同じだ。日本だろうがフランスだろうが。世界中どこ行っても、お前は前からしくやってこい」

薫 「幸大」

幸大 「って俺も教わった。デセルの妖精にな」

葉月 「そろそろ行かないと、飛行機に乗り遅れるわ」

一同、見送りに出てくる。

音次郎 「高沢さん、いろいろありがとうございました」

薫 「もっと飯食え。里茄も、元気な子、産めよ」

里茄 「ちゃんと帰ってきてくださいね。勝負はまだ、終わってませんから」

薫 「里茄ちゃん、俺に勝つつもり？」

里茄 「勝ちます。高沢さんにも、水無月シェフにも」

音次郎 「僕も。僕だって負けません」

僚介 「忘れ物は？ ありそうだな、絶対」

暁 「マロンのパウンド（包みを差し出す）」

音次郎 「いいなあ」

薫 「サンキュ。暁」

暁 「待たないからね。どうせ、パリジェンヌにつっかけられるんだから」

薫 「エマニュエル・ベールだったら、断れねえな。いや、むしろ踏まれたい」

暁 「あんたなんてピンヒールで踏まれて、穴だらけにされてくればいいのよ」

薫、暁の手を取り、包み込むように握る。

葉月 「お世話になりました、くらい言ったらどう」

薫 「（葉月の肩を叩く）この幸せ者」

葉月 「痛っ。高沢！」

僚介 「あーあ。最後の最後まで」

幸大 「行って来い」

薫 「行ってきます」

皆、口々にお別れを言う。薫、客席へ退場。

音次郎 「なんか、コンビニに買い物に行くみたいにな、軽く行っちゃいましたね」

里茄 「高沢さんらしい」
葉月 「ちよっとやだ。泣いてるの？」
暁 「泣いてない。今日はマロンアイスよ」
葉月 「試食させて」
暁 「あげない」

暁、退場。幸大、里茄、僚介、それぞれ散る。

音次郎 「今日もまた、昨日と同じ一日ですね」

葉月 「そろそろ嫌になった？」

音次郎

「僕はやっぱり、お父さんの言葉に賛成です。口でどんなこと言っただけ、やっぱりみんな、料理に夢中だし、信念があるし、自分の腕で誰かを喜ばせたい、幸せにしたいって、毎日毎日、朝から晩まで頑張るんです。レストラン、モンレーブは、僕の夢、そのものです」

葉月 「わかってるわ。だから、料理人なんて嫌いなものよ」

音次郎 「僕のことですか？」

葉月 「ええ。大嫌い」

音次郎 「ありがとうございます！」

幸大の声 「音次郎！」

音次郎 「はいっ！」

音次郎、元気よく走っていく。見送る葉月。

幕。